

清末新聞受容における二三の問題点

阿川 修三

On Acceptance of Newspapers in The Late Qing Dynasty:A Few Problems

Agawa Shuzo

有關中国報刊史的論著已不少、但總有一個問題沒有說清楚、這就是關於中国報刊讀者的問題。我在這篇論文上、用孫宝瑄的『忘山廬日記』和剛剛出版的蔡元培『日記』（『蔡元培全集』第15卷）等資料就研究這種問題不可缺少的基本事情—發行量、價格和流通形態—加以論述。

1. はじめに

中国新聞史研究¹⁾は従来専ら発信側、つまり新聞自体乃至新聞編集者を含む新聞の書き手を対象としてきたと言っても過言ではない。中国新聞史の先駆けをなす、戈公振の『中国報学史』（商務印書館、1927年初版、香港太平書局、1964年影印本）は言うに及ばず、また1980年代に書かれた、方漢奇の『近代中国報刊史』（山西人民出版社、1981年初版、1991年修訂再版）も、更に最近刊行された、徐松榮の『維新派与近代報刊』（山西教育出版社、1998年）もその傾向を踏襲している。新聞がどのように読者に受容されたかという、観点はほぼ抜け落ちていたのである。

筆者はこの数年来、同僚の白井教授の主宰するメディア文化研究会に参加し蒙を啓かれることが多い。その会で刺激を受け、読者論の視点から自分の専攻とする清末思想史を見るとどうなるか、ということを経

考えてきた。清末、思想の伝播に新聞が果たした役割は極めて大きい。即ち清末の主要な思想家は、梁啓超にしろ、章炳麟にしろその主要な政論は多く先ず新聞に発表され、伝播していったのである。であるならば、当時、新聞の読者がそれをどのように受容していったかを解明することによって、従来理解されてきたものに比べ、清末思想史の実態がより明らかにできよう。そこで先頃、筆者は清末の新聞読者即ち受信側がどのように新聞を読んだかを、清末の熱心な新聞読者、孫宝瑄の日記『忘山廬日記』を資料として論文を書いたのである²⁾。その執筆過程で、新聞受容を研究する基礎となるべき事項に解明されていない点が多いことを痛感したのである。たとえば、新聞の発行部数、価格、流通などである。本稿では、単なる覚え書きとなるかもしれないが、先人の業績も踏まえつつ、これらの問題を探究しようと思う。

2. 発行部数

新聞の発行部数は、その新聞がどのぐらいの影響力を持つかの目安になるものであり、新聞史研究、就中その読者論的研究では不可欠のものである。ところが、清末の新聞は、発行部数がわからないものが大半であり、それがわかるものも概数でしか知ることができないのある。それは発行部数の記録が残っていないからである。日本の場合、新聞条例で、発行部数を所在地の府県に届けなければならなかったので、明治初年からの各新聞の発行部数は府県の各年度統計表や、警視庁、内務省の統計書に掲載され、現在容易に見ることができる。中国では、新聞に関する法規ができたのは非常に遅く、新政後の光緒32（1906）年発布の、報章応守規則、更に大清報律からである。また、多くの新聞社は清朝の権力が直接及び得ない租界にあったため、清朝側に、部数をはじめとする新聞社に関する資料はほとんどなかったと言う次第である。

では、今日、清末の新聞の部数を知る術はないのか。既に述べたごとく、少数の新聞については概数ならわかるのである。陳平原が当時の主要な新聞の発行部数を推定した¹³⁾ところによると、以下のごとくである。なお次の数字は、いずれも一号あたりの部数であり、はじめの数字が最少の部数、後の数字が最高の部数である。

【万国公報】 1 8 0 0 ~ 5 4 3 9 6 部

【時務報】 4 0 0 0 ~ 1 7 0 0 0 部

【新民叢報】 4 0 0 0 ~ 1 4 0 0 0 部

【礼拝六】 ? ~ 2 0 0 0 0 部

【民報】 6 0 0 0 ~ 1 7 0 0 0 部

以上は、陳がそれぞれ新聞の関係者の証言や新聞の読者への公告（告白）にあげられた発行部数に基づき、それぞれの新聞の発行部数を推定したものである。陳自身が注に述べる¹⁴⁾ごとく、後者は前後矛盾することがあり、完全には信用しがたい面がある。また、前者も関係者の発言であるために多少誇張して多めになることも考えられる。つまり、その数が、100パーセントは信用できないところもあるのである。そこで、陳が既に推定した以外の新聞を一、二、先行する研究に拠ってその部数を推定した上で、清末の新聞の発行部数についての傾向を見ようと思う。

まず、陳が取り上げた【新民叢報】と並ぶ変法派の新聞【清議報】はどうであろう。方漢奇によれば¹⁵⁾、約四千部と言う。これは平均であろうが、最高部数は拠るべき資料がなく不明である。

また、上海で発行された、当時を代表する商業紙【申報】の発行部数はどれぐらいであろうか。創刊当時は、五、六百部、1881年には二千部、1897年には七、八千部、1907年には一万部であったという¹⁶⁾。

以上の二紙を含めて、清末の新聞の発行部数の傾向を見ると、各紙大

体平均四、五千部、上限は数万部というところであろう。この数字は当時四億の人口を擁した中国のものとしては、大変少ない。同時期の日本では、中国と同規模乃至それを上回る規模の新聞が林立しており¹⁾、それと比較すれば、その少なさはより明らかとなる。

とはいえ、上記の発行部数即ち読者数と言うわけではない。清末の新聞は、一度読まれればすぐに捨てられてしまう訳ではない。現在の新聞と異なり、清末の新聞は報道性よりも啓蒙性の方が強く、一部の新聞が何人もの手を経て読み継がれるのを常としたようである。であるならば、その読者は、発行部数の何倍にも膨れ上がる訳であろう。新聞の影響力を考えるには、その流通をも含めて考えねばならない。

3 価格

新聞史研究、特にその受容の研究においては、新聞の価格も重要な問題であろう。既に挙げた『中国報学史』をはじめとする中国新聞史には、この点についてほとんど触れられていない。そこで、清末の新聞は概ね奥付に価格が載っているので、実物であれ、影印版であれ、現在実際に見ることができる新聞の奥付を幾つか調べると、価格は以下のごとくなる。

【万国公報】(月刊) 一部洋一角三分、一年洋一元 (1989年)

【時務報】(旬刊) 国内郵送料込み、一部洋一角五分、一年洋四元

【清議報】(旬刊) 一部洋一角五分、一年洋四元 (1898年)

【申報】(日刊) 一部洋一分四厘 (1889年)²⁾

【新民叢報】(半月刊) 一部洋二角五分、一年洋五元 (1902 - 1907)

* 当時、洋とは貨幣の意味で、銀貨、銅貨を指した。

以上の各新聞の価格は当時の物価に比してどうであったのか。まず、

当時の物価を知らねばならないが、管見の限り適当なものが見つからない。そこで些か傍証にすぎるが、陳平原が清末の小説家の原稿料について述べた論考⁹⁾に拠って当時の貨幣価値を類推していく。陳はこの論考で、包天笑が原稿料としてもらった洋百元を、彼の「上海への旅費と数ヶ月の一家の生活費に当たった」という回想に基づいて、当時としてはかなりの金額であると論断している。それによって類推すると、たとえば、『時務報』、『清議報』の年間購読料洋四元というのはかなり高価であると言わねばならない。個人がおいそれとは買える値段ではない。とすれば、それは読者の読む形態にも影響を及ぼそう。その点は次章で詳論することにする。

4. 流通

ここで言う流通とは、新聞が読者にたどり着くことを意味する。この章では新聞の流通の形態について論じる。

中国の場合、新聞普及のために政府が設置した、日本の新聞縦覧所の様なものは当時存在しなかったし、また図書館の前身である蔵書楼が変法運動に促されて各地に誕生してはいたが、そこには新聞は置かれなかったようである。¹⁰⁾ よって、清末の新聞の流通形態は、大別すると、購読と個人間の貸借であったのである。そこで、まず、購読を細かく分類すると、新聞社からの郵送購読、新聞社での購読、販売代理店からの購読などがある。¹¹⁾

新聞社からの郵送購読はほとんどの新聞が行っていた。たとえば、『時務報』の巻末に「本館価目」の欄に、「凡そ先ず掛号（現金書留）にて報費（新聞代）を十両交（おく）りし者には報を五年送る。十元では報を三年送る。四元では一年送る」（『時務報』第十五冊、光緒二十二年十一月廿一日）とあり、郵送購読の数が割合多かったことを物語っている。

次に新聞社での直接購読である。これは発売日から日を置かず見ることができるとある。また、当時の新聞社は、他の新聞の販売代理店でもある事が多く、一度に何種類もの新聞、またその中には遠隔地の新聞もあり、それらを買うこともできたのである。そのうえ当時の新聞社は、新学の新刊書の書店の役割をも兼ねていて、書物も販売しており、当時の新聞社はなかなか便利であったのである。たとえば、上海の『時務報』館には、澳門の『知新報』、上海の『農学报』、上海の『萃報』、長沙の『湘学报』⁹³、天津の『国聞彙編』⁹⁴など中国各地の主要紙が販売されていた。また、孫宝瑄は嚴復の訳した『原富』（アダム・スミス著『諸国民の富』）を上海の『新聞報』館で買ったのである。⁹⁵

次に販売代理店からの購読である。当時新聞社は、国外も含めて販売代理店を各地に設けた。たとえば『時務報』を見ると、巻末に本館各処派報所処の欄⁹⁶があり、六十数ヶ所の販売代理店が掲げられている。中国国内が大半を占めるが、華僑の多いシンガポール、ペナン、神戸などにもある。国内では四川、湖北、湖南、安徽、江蘇、江西、浙江、福建、広東などの中南部に偏在している。しかし、国内で発禁処分を受けていた『清議報』は巻末の本館各地代派処の欄に拠ると、四十ヶ所程度の代理販売店の内、国内は数ヶ所であり、大部分が華僑の多い、北米、東南アジアである。更に、国内は清朝の権力の及びにくい、キリスト教関係の施設や租界の日系新聞社乃至日系商社である。

この他に、その新聞の支持者が販売代理人となり、彼らからも購読できたのである。近代中国を代表する思想家で且つ教育者の蔡元培がまだ清朝の少壮官僚であった頃、郷里浙江の改革派の青年が創刊した『経世報』や友人の創刊した農業の啓蒙紙『農学报』の北京での販売代理人となっている。彼の『日記』⁹⁷によれば、光緒二十三年七月頃から、翌光緒二十四年の三月頃まで彼の元に新聞社から四十冊ほど『経世報』や

『農學報』が送られ、また彼が友人にそれを送っている。以上が清末の購読の主たる形態である。

貸借はどのように行われていたのでしょうか。当時、中国には図書館はまだ存在しないし、日本にあったような新聞縦覧所もなかったので、新聞を読もうとして、それが買えない場合には、人から借りるほかない。ここで買えないというのは、二つの意味を含んでいる。すなわち、一つには、既に第二章の価格のところで述べたように、当時の新聞の価格はかなり高価である。だから、一紙を購読することすらかなり困難であり、更に数紙を購読するのは普通の人の資力では不可能に近いという意味である。もう一つは、中国国内では、清朝政府が発禁処分しているため、お金があっても手に入らないという意味である。そこで個人間の貸借がかなり行われたのである。

当時の知識人の日記を見ると、新聞の貸し借りがよく出てくる。たとえば、以下のごとくである。

- ① 菊生〔張元濟〕を見、澳門の『知新報』五冊を借る。（『蔡元培全集』〈浙江教育出版社、1998年〉第十五卷『日記』124頁、光緒二十三年四月十有九日の条）
- ② 許中書と同〔とも〕に日本人杉見仙（幾太郎）を訪れ、仮〔か〕り、『亞東時報』第二冊を得、……（『蔡元培全集』第十五卷『日記』186頁、光緒二十四年四月十日の条）
- ③ 『清議報』を覽るに、友人の処より仮〔か〕りて觀る。（孫宝瑄『忘山廬日記』〈上海古籍出版社、1988年〉上卷298頁、光緒二十四年十二月二十六日の条）
- ④ 夜、〔問樞〕と与同〔とも〕に高君を日本使館に訪れ、『新民叢報』二冊を携え帰る。（孫宝瑄『忘山廬日記』490頁、光緒二十八年二月十六日の条）〈上海古籍出版社、1988年〉

なお、[]は筆者注。

①、②は著者が北京にいたため、簡単に手に入らなかったために借りたのであり、③、④は国内では禁書であったため借りたのであろう。当時、新聞の貸し借りは普遍に行われたようであり、それも新聞流通の重要な形態であったと言えよう。

最後に、既に述べた、購読の変形というべき、新聞共同購読サークルのことを紹介してこの章を終わりにしたい。

偶然、蔡元培の日記を読んでいて、気がついたことなのである。蔡元培は戊戌の歳（光緒24年、1898年）、北京で官僚をしていた時、会試、殿試の同期合格者と新聞共同購読サークル「求实書屋」を行っていた。『蒙学报』（児童教育研究紙）、『萃報』（新聞のダイジェスト紙）、『農学报』（既出）、『湘学报』（湖南の変法派の新聞）の四種類の新聞を回覧し、十日ごとに松筠庵に集まり議論したようだ²⁸。少壮官僚の勉強会を兼ねたものようである。新聞の価格は既に述べたように高価であり、何紙も購読するのは、まだ薄給の若手官僚にはむりであろう。このようなサークルは他にもあったであろうが、まだほかのものを探し得ないので、ここでは紹介に止める。

4. 結語

以上のように、新聞受容研究にとって重要と思われる発行部数、価格、流通について述べてきたが、結局のところ、覚え書き程度を出なかった。筆者の力量不足によるものではあるが、資料不足もそれに輪をかけた格好になった。以上の問題については、以後、関係資料を渉猟して他日の解明を期したい。なお本稿は学内共同研究「メディア文化研究」の成果の一部である。

注

- (1) ここでは、専ら中国での新聞史研究について述べている。台湾では、管見の限りこの研究はあまり盛んでない。頼光臨の『中国近代報人と報業』（台湾商務印書館、1980年）という专著もあるが、中国と同様の研究傾向にある。なお、日本では、管見の限り、中下正治の『新聞に見る日中関係史—中国の日本人経営紙』（研文出版、1992年）以外めぼしい中国新聞史研究の論著はない。
- (2) 『維新変法期の新聞の読まれ方—孫宝瑄の場合』『文教大学文学部紀要』13-2。
- (3) 陳平原『二十世紀中国小説史』660～661頁（『陳平原小説史論集』中巻、河北教育出版社、1997年）。
- (4) 陳平原『二十世紀中国小説史』659頁の注②（『陳平原小説史論集』中巻、河北教育出版社、1997年）。
- (5) 方漢奇『中国近代報刊史』第四章第四節184頁。
- (6) 徐載平、徐瑞芳『清末四十年申報史料』73～74頁（新華出版社、1988年）。
- (7) 山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局、1981年）「別表・新聞発行部数一覧」。
- (8) 注(6)と同書。
- (9) 陳平原『二十世紀中国小説史』670頁（『陳平原小説史論集』中巻、河北教育出版社、1997年）。
- (10) 吳晞著の『從藏書樓到圖書館』第八章「近代公共圖書館的先河—古越藏書樓」（書目文獻出版社、1996年）によれば、1903年に開設された古越藏書樓では、「日報」（新聞）が所蔵され、閲覧できたとある。但し、管見の限り、これは稀な例であろうから、本論文では図書館での閲覧については論じない。

- (11) 『申報』などの商業紙は、その部数のかなりの部分を新聞売りが売りさばいていたようである（『中国近代報刊史』他）が、『時務報』をはじめとする変法派系の新聞についてはこの点現在のところよるべき資料がないので、本論文では論じない。
- (12) 『時務報』第三十三冊、光緒二十三年六月廿一日の「本館告白」。
- (13) 孫宝瑄『忘山廬日記』（上海古籍出版社、1988年）上巻、17頁、光緒二十四年二月初四日の条。
- (14) 孫宝瑄『忘山廬日記』上巻、336頁、光緒二十七年三月二十三日の条。
- (15) 『時務報』第二十七冊巻末（光緒二十三年四月十一日）。
- (16) 『蔡元培全集』第十五巻（光緒二十三年五月四日から光緒二十四年三月十有七日の条）。
- (17) 『蔡元培全集』第十五巻179頁（光緒二十四年五月二十一日の条）。